

化粧行為を構成する文化 ——社会・文化的アプローチの視点から——

木 戸 彩 恵

1. はじめに

化粧は、顔を中心とする身体に意図的な加工（肌の手入れ、顔面の色・質感・形の変形）を施し、その容貌に変化をもたらす行為である。身体の中なかでも、顔は最もディスプレイ的要素の高い部位である。それゆえに、顔に化粧を施すことは、自己の個性表現、審美的表現などといった意味で大変効果的である。化粧は、コミュニケーションのツールとして、対人場面において大きな役割を果たす。

一般に、「化粧」という言葉は広義の意味をもつが、薬事法第二条¹では、化粧品は次のように定義されている。「『化粧品』とは、人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされている物で、人体に対する作用が緩和なものをいう。（電子政府より、薬事法については電子政府を参照した）」。化粧品は、1.ケア、2.メイクアップ、3.フレグランスに大きく分類することができる（阿部,1992）。さらに、阿部（1992）によると、1は、一般的にスキンケアと称される「維持」機能を、2・3は「演出」機能を果たす。なお、2は「維持」機能ともやや関連するとされている。

このような定義からもわかるように、化粧は「ケア」と「ビューティフィケーション」という2つの側面を持つ。基本的に、前者は、自己や自身の身体を慈しむ行為であり、手入れ、健康の維持といった目的も含まれる intra-personal な性質を持つ化粧の側面である。一方、後者は他者に対して自分らしさをアピールするために化粧を施している自分を見る「他者」を想定し、他者に対して自分らしさをアピールするといった、他者との対峙を目的とした inter-personal な性質をもつ化

粧の側面である。

なお、大坊（1997）は、化粧の意味を「変身」と「粧^{よそお}う」こととしている。前者は、素顔に色彩を施し、眉を描き直したり、まつげを長くするなどして、構造的には容易には変えられない顔の特徴を操作し、印象を変えようとする意図が含まれる。日常の自分と特別な自分との切り替え、日々の自分から抜け出す、変身することによって抑制されている自己の別な側面をさらすことがその目的とされる。後者は、いつもの自分に手を加え、恒常的に一定の対人的効果を目指すものであり、いわば自己の「改善」行為として機能する。

このように、化粧とその行為を媒介する化粧品は、一見するとそれぞれが独立した要素ではあるが、決して単一に機能を果たしているわけではない。それぞれが複雑に連鎖しあいながら化粧行為は成立するのである。

2. 化粧の文化化

化粧は、有史以来、人類に広く普及している文化的行為の一つである。その性質は可変的であり、時代背景、所属する集団、文化によって、化粧のとらえられ方や意味合いは変容してきた。

たとえば、現代の日本において、化粧は「女性」一般のおこなう行為である。化粧は、化粧自分らしさを容易に、直接的に示す手がかりである顔の印象管理の方法として、多くの女性から広く受け入れられている（阿部、2002 など）。

しかしながら、明治時代以前の日本においては、化粧品は高級品であり、化粧をすること自体、身分の高い一部の人々（男性も含む）に限られていた（上谷、2006）。さらに歴史を紐解けば、その歴史は、現生人類

の誕生にまでさかのぼることができる」と推測される(阿部, 2002)。古来、化粧は呪術的な意味をもっており、神事や呪いを目的として用いられており、化粧をする対象は女性というよりもむしろ男性であった(村澤, 1992)。

現代の日本では、一般的に、化粧は成人女性の身だしなみであると指摘されており(岡村・金子, 2005)、日本人成人女性の多くが(化粧の濃さや施し方の程度に差はあるものの)化粧をしている。同様に、化粧の本格的な習慣化は成人としての社会参入条件であることも阿部(2002)によって指摘されている。実際、就職活動、成人式などのような、社会参入場面においては、女性に対して化粧することを直接的・間接的に求めるシュチュエーションは少なからず存在する。

日本に特徴的な化粧の傾向性として、石井・石田(2005)は、「文化的に横並び意識が強いとされる日本においては、目立たない外見でないと社会からバッシングされるという恐怖感と、美しくない生きづらいという二重条件のなかで暮らしている」ということを指摘している。目立つことや派手さを求めるのではなく、自分を平均に近づけるために化粧をするのである。こうした傾向性は、日本人のナチュラルメイク志向(村澤, 1992)を形成しているといえる。

このように、化粧は、他者に対して自分の魅力を伝えるための単なるツールとしてのみではなく、女性の生き方やアイデンティティにも影響を与える(岡本, 2005)。特に、化粧をする主体が女性であることから、性役割やセルフ・イメージの形成に対する影響は強いと考えられる。

先述したように、化粧はその機能の一部として、対人関係や、コミュニケーション場面において重要な機能をはたす。そのため、化粧をする主体である個人の化粧の文化化(acculturation)について考えること、個人の持つ文化の意味を考えていくことが重要なこととなる(矢吹, 2004)。

すなわち、日常的な化粧に対して文化・社会的要因が与える具体的な影響、化粧行為が個人に与える影響やその変化プロセスについて具体的に考察していく研究が必要なのである。文化的行為である化粧は、近年まで「おしゃれ」の一環であると考えられ、文化的な価値を見出されることや学術的な研究がなされること

はあまりなかった。一方で、近年では、外見のもつ力が大きく意識されており、その文化的な価値・重要性は徐々に認められはじめている。

3. 心理学における化粧研究とその課題

化粧を心理学の研究対象として扱う研究は、1980年代に、臨床的効用を検討することを目的として開始された。以後、多くの研究がなされた結果、現在では、その方法も、取り扱う対象は多岐にわたり、体系的な知識が積み上げられている。本項では、その主要な分野について概観する。

(1) 臨床的研究

化粧をケアの一貫と捉える研究として、心身に疾患を持った人を対象とする臨床的研究がある。臨床的研究は、グラハムとクリングマン(1985)による化粧の臨床的効用についての関心から始められた。

現在では、太田母斑などのような外観に障害を持つ人、老人性痴呆症を中心にうつ病や統合失調症など、精神に障害をもつ患者の症状改善に役立ったという報告がなされている(野崎, 2004; 加藤・小松・濱畑, 2005 など)。化粧を臨床場面に適用することによる主たる効用としては、情動の活性化、食欲の上昇、痴呆の改善などといったポジティブな効用が認められている。

このような研究が積み重ねられ、検討された結果として、福祉・医療を目的とした化粧サービスが各方面において取り入れられている。特に、美容先進国であるフランスでは、化粧はヒューマン・ケアとして一般的に受け入れられており、ソシオ・エステティックと呼ばれる国家資格となっている。日本国内においても、化粧を医療行為として、積極的に治療に取り入れる試みが始められている。

(2) 生理心理学的・免疫学的研究

第2に、化粧が心身の健康に与える直接的な影響を検討することを目的として、生理指標が用いられる研究もある。

阿部(2002)は、スキンケアと生理指標の相関性から、スキンケアが日常生活で降りかかるストレスを緩和し、本来の自分を取り戻す機能としての効果をもつことを

報告している。また、木戸・サトウ・佐々木・吉井(2006)は、女性の身体的・内的な変化を表す指標として、肌状態に着目し、肌表面の生理指標と心理的要因の関連性を検討するために基礎的な研究を行っており、主観的な肌状態と日常生活の充実の関連性を指摘している。さらに、管(2004)は、S-IgA 濃度を指標とした精神神経免疫学的な手法から、化粧品がもたらす心理的效果と、免疫の活性化への有益な効果を見いだしている。

(3) 社会心理学的研究

第3に、社会心理学的研究が挙げられる。社会心理学的研究領域では、化粧は容貌印象管理の一環として捉えられており、対人コミュニケーションや社会的スキル(social skill)、性役割といった観点から研究がおこなわれている。

Cash, Dawson, Davis, Bowen & Galmbeck(1989)は、女性の身体的魅力と化粧の関連を検討しており、Rudd(1999)は、女子大学生のボディイメージと化粧を含む容貌印象管理行動の関わりを検討している。Mack & Rainey(1990)の研究によっても、化粧を含む外見の手入れを入念にしている外見魅力の高い人の方が採用されやすいことが報告されていることから、化粧をマナーとみなす社会的傾向性・化粧行為や、要望印象管理がいかに文化的根強さをもっているかを窺い知ることができる。

大坊(2004)は、化粧を社会的スキルとみなし、一連の研究結果から化粧のもつ心理的な働きとは、1) 自己満足感と対人的な効用といえる役割遂行、2) 自己呈示を通じてなされる自尊心の向上、3) 他者からの評価向上による満足感である、とまとめている。

(4) 比較文化的研究

第4に、比較文化的研究がある。比較文化的研究では、民族による魅力的な顔・「美人」顔の形態特徴やその認知方法といった個々の要素に焦点をあて、その差異が検討されている。

例えば、大坊・村澤・趙(1994)は、日本と韓国の女子大生を対象とし、両国の女性の容貌写真の提示をおこない、自国民らしさ、対人魅力度・パーソナリティ印象といった容貌特徴に対して評定を行わせ、その文化差や回答の傾向性について分析をおこなっている。

そして、その結果から、日本人の顔認知が、韓国人と比較して平面的であることを指摘している。

(5) 先行研究における課題

従来の化粧研究は、女性が化粧をするということを前提してなされてきた。そして、多くの場合、化粧は女性にとってポジティブな効用をもたらすものとして取り扱われてきた。研究の文脈において、このように化粧が取り扱われてきた理由として、次の2つの理由が考えられる。一つは、個人の持つ文化について着目されてこなかったことであり、もう一つは、量的研究が主流な研究手法となっていたことである。

しかし、化粧に対する態度や考え方、実際の行為には、個人差があり、一様であるとは言いがたい。そのため、世界や人びとが生きる世界の複雑性を認めつつ、社会・文化的環境や時間によって変化する「現実」を把握するためには、フィールドと事例に密着した「ローカルな理論」に関心を持つ(やまだ, 2004) 質的方法が相応しいと考えられる。

文化という観点から、こうした主張を実現する方法として、社会・文化的アプローチがある。次項において、社会・文化的アプローチについて詳述したい。

4. 文化の捉え方 —社会・文化的アプローチの方法から

(1) 文化とは

Hatano & Wertsch (2001) は、「文化」は人間生活を構成する相互関係性をもった道具としての特別な媒介であるとしており、文化はある程度のコミュニティのメンバーと共有されるし、しばしば世代を超えて継承される。こうした媒介となる道具には身体ツール、常識的知識や信念、社会的認識、身体的、象徴的、社会的ツールと関わる習慣的な行動様式が含まれる。

個人に形成された文化的行為は、ある文化内部で多様性をもちながらも、その根源として、文化としての共通のパターンを有している。つまり、個人の持つ文化は、個人が独自に開発するものではなく、歴史的に構築された文化という、多様だが、ある程度の制約を持つまざまな可能性の中で、個人が選択的に取り入れて、形成するものである。

また、Valsiner (2000) では、個人と個人が生きる文脈は、文化的に構成されており、人生発達において、ある文化を獲得する（獲得しないという選択をする）プロセスや関わり方は多元的で多様であると考えられている。

つまり、文化の中での多様な発達とその変容をとらえることは、個人レベルでの化粧文化の獲得を考えていく上でも有用であり、十分に意義深いことであると考えられる。

（２）社会・文化的アプローチ

心理学において、文化・社会を捉える方法として、社会・文化的（sociocultural）アプローチがある。

社会・文化的アプローチは、Vigtsky の「社会・歴史的（sociohistorical）」もしくは「文化—歴史的（cultural-historical）」アプローチと Bakhtin の対話理論を中核として構成されている。

社会・文化的アプローチの提唱者である Wertsch (1991) は、この基本的な目標を、「人間の心的過程と文化的、歴史的さらには制度的な状況との本質的関連性を説明していくこと」としている。このアプローチでは、既存のパラダイムに拘束されない、超領域的な「人間性の科学」の構築を目指したもので、現代社会の深刻な諸問題をその複雑さにおいてとらえ、それをめぐる議論に関与することが目論まれている（石橋、1997）。

社会・文化的アプローチの考え方は、文化心理学（cultural psychology）の考え方と、多くの点で一致する。こうした潮流においては、「文化的伝統と社会的習慣が人間の心を以下に制御し、表現し、変換し、変更するかに預かっており、その結果、人間の精神、自我、感情においては普遍性よりも民族的な違いというものがより大きくなっている」（Shwder, 1990）という前提が一般に共有されている。

Vigotsky は、精神現象について、感覚・知覚などの精神プロセスについては実験で扱えると考えていた。一方で、高次の精神プロセスについては実験ではない方法で社会的文脈と共に理解すべきだと考えていた。実際、Wundt は、実験的な内観が適用できない分野に対しては、観察と記述の理解を軸とする方法を用いていた（Flick, 1995）。出来事が自然の流れのなかで生

起する現実の世界から導き出される結果と、統制変数を用いた実験室実験によってもたらされる結果は異なる（Strauss & Corbin, 1998）。それゆえに、個人と個人が生きる文脈は、文化的に構成されている（Valsiner, 2000）といえ、人生発達において、ある行為を文化として獲得する（獲得しないという選択をする）プロセスや関わり方は多元的で多様である。

精神への社会・文化的アプローチの基本的な考えにおいて、その記述と説明の対象は、人間の行為（action）である（Wertsch, 1991／田島ら訳, 2004）。人間の行為は道具や言語といった媒介手段（mediational means）を用いてコミュニケーションが行われる。これらの媒介手段は、行為の形成に本質的に関わっている。ここでは、「個人」は単一体としての個人ではなく、「媒介—手段—を用いて—行為する—個人（individual(s)-acting-with-mediational-means）」として捉えられる。

Wertsch は、人間の精神活動を理解するためには、行為媒介として用いられている記号装置を正しく理解しなければならないと述べている。ここでの記号装置とは、Bakhtin のいう「他者の声」（Bakhtin, 1963）をさす。人間の精神機能は基本的にはコミュニケーション過程とむすびついており、個人の中で展開されている精神機能は社会的なコミュニケーション過程の中にその起源がある。つまり、個人が何らかのこぼを発するときには、人間のコミュニケーション過程と心理的過程の対話という、少なくとも２つの声が同時に聞こえてくる。こうした意味で、声は常に「多声的である」といえる。

社会・文化的アプローチにおいて、「声」の概念を扱う際の具体的な方法に関する示唆として、土屋（2004）の、どのような「声」が「特権化」²されているかを知ることと、対象にとってどのように「特権化された声」が経験されているかを知ることでは、分析の視点が異なってくるとの指摘がある。その上で、「特権化された声」が、主体によって具体的にどのように経験されているのかという、主体と「特権化された声との関係」を、経験する主体の側からとらえる視点がより心理学的であるとしている。われわれが何らかの社会的実践の場に身をおいたとき、そこで居心地の悪さがあるとなれば、それはそこにおいて何らかの「特権化」された

「声」があるということ、さらにその「特権化された声」と自分の「声(複数)」のいずれかとの関係において違和感が生じているのではないかと考えられるのである(土屋, 2004)。

5. 社会・文化的アプローチからみた化粧研究の課題と展望

木戸(2006)の研究では、質的研究の方法論の一つである複線径路・等至性モデル(= Trajectory and Equifinality Model :TEM, Sato, Yasuda, Kido, Arakawa, Mizoguchi & Valsiner. (inpress); Valsiner and Sato, 2006 など)を用い、化粧へと至るプロセスと文化的越境(ここでは、米国留学)を経験した日本人女子大学生の化粧観の変容について具体的な記述を行ったが、それはあくまでも行為のレベルからの記述にとどまっている。そのため、化粧という行為自体のもつ「意味の行為(act of meaning: Bruner, 1990)」十分な検討にはなっていない。

そこで今後の研究として、外見変容(主として、メイクアップ化粧)に対する「他者の声」の影響研究対象とし、研究対象としては、化粧をしない人・する人の両方を研究の対象とし、それぞれにとっての化粧の持つ意味を考えていきたい。化粧をする人とし、しない人の双方から語りを得ることによって、それぞれの立場における化粧をすることの意義・しないことの意義が相対的に見えやすくなり、従来の化粧研究のように、化粧をすることに対してポジティブな効用——方向的な価値づけ——が強調されることを防ぐことが出来ると考えられる。

具体的には、化粧をすることが当たり前という価値観を持ち、化粧をすることを是とし、それを前提として行われてきた文化的文脈に埋め込まれた化粧研究自体の含む問題を、「他者の声」(Bakhtin, 1963)という概念を通じて問い直したい。自己と化粧と社会の関係性をあらためて考察することにより、文化と個人を媒介する行為としての化粧の意味を明らかにすることが可能となると考えられる。

その際には、特に化粧行為自体が持つ意味を、社会的な方向付けによる制約に着目しながら考察していくことが重要になると考えられる。つまり、「社会的言語」や「特権化された声」を問題とすることは、個人が社会

との相互作用を通してする行為を問題にすることなのである。Wertsch(1991)の言葉を借りれば、「我々の実際の日常生活的な発話には、他者の言葉が満ち溢れている。我々は、ある他者の言葉については、それが誰の言葉であるのかを忘れて、それに自分の声を完全に融合させたり、また別の他者の言葉については、それを自分にとって権威ある言葉として受け取り、それによって自分の言葉を補強したり、さらにまた別な他者の言葉については、そこにその言葉に無縁な、あるいは敵対的な自分自身の志向性を組み込んだりしているのである。」

このような対象について一化粧が個人にとっていかなるものとして捉えられているか——については、時間的経緯と選択肢といった問題を考慮に入れつつ、文化的行為としての意味について、社会・文化的アプローチから研究を検討する必要がある。

Bakhtin の「他者の声」を意識しつつ、社会・文化的アプローチの方法を用いることにより、これまでに可視化されることのなかった媒介としての化粧——化粧の方法・濃さ、化粧をする際に意識する対象などを決定付ける、見えない他者の存在等について一個人がいかに意識しているかを考察することが可能となるだろう。一連の試みとして、このような研究を行うことによって、心理学において質的方法を用いることの利点を十分に生かしつつ、従来の化粧研究に対して一石を投じることができると考えられる。

謝辞

ご多忙中にもかかわらず、丁寧な指導をくださいました、やまだようこ先生、ご助言を下された研究室の諸先輩方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 阿部恒之 1992 化粧の心理学 *Fragrance Journal*, 7, 55-61.
- 阿部恒之 2002 ストレスと化粧の社会生理心理学 東京：フレグランスジャーナル社
- Bruner, J.S. 1990 *Acts of meaning*. Harvard University Press.
- 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳) 1999 意味の復権—フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房；東京
- Cash, T., Dawson, K., Davis, P., Bowen, M. & Galmbeck, C. 1989

- Effects of cosmetics use on the Physical Attractiveness and Body image of American College Women. *The Journal of Social Psychology*, 129, 349-355.
- 大坊郁夫 1997 魅力の心理学 東京:ポラ文化研究所
- 大坊郁夫 2001 化粧行動の社会心理学:化粧する人間のこころと行動 京都:北大路書房
- 大坊郁夫 2004 粧うことと癒すこと 心の科学 117, 73-78, 日本評論社
- 大坊郁夫・村澤博人・趙鏞珍 1994 魅力的な顔と美的感情—日本と韓国における女性の顔の美意識の比較—感情心理学研究 1, 101-123.
- 電子政府 2007 薬事法 <http://law.e-gov.go.jp/> (情報取得 2006/2/04)
- Flick,U. 1995 *Qualitative Forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 小田博志・山本則子・春日常・宮路尚子(訳) 2002 質的研究法—〈人間科学〉のための方法論 東京:春秋社
- Graham,J.A.& Klingman,A.M. (Eds.) 1985 *The Psychology of Cosmetic Treatments*. New York:Prager 早川律子(訳) 1988 化粧の心理学 東京:週刊粧業
- Hatano,G. Wertsch,J.V. 2001 *Sociocultural Approaches to Cognitive Development: The constitutions of Culture in Mind*. *Human Development*, 44, 77-83.
- 石橋由美 1997 社会文化的アプローチを読み解く:ブルーナーの文化心理学をてがかりに 心理科学, 19, 32-48
- 石井 政之・石田かおり 2005 「見た目」依存の時代—「美」という抑圧が階層化社会に拍車を掛ける. 東京:原書房.
- 上谷香陽 2006 化粧における「身体」—〈素肌〉の社会的構成— 応用社会学研究, 48, 153-161
- 加藤由有・小松美砂・濱畑章子 2005 老人保健施設で化粧療法を受けた高齢女性の化粧への考えと感情の変化. 看護技術, 51, 905-908.
- 木戸彩恵 2006 異なる文化的状況に属する青年期日本人女子学生の化粧行為—日本とアメリカでのインタビュー調査の質的分析. 立命館大学文学研究科修士論文 (未公開)
- 木戸彩恵・サトウタツヤ・佐々木喜美子・吉井隆 2006 生活充実感と肌状態の関わり方の検討(1)—肌生理指標と質問紙調査の検討から— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 247.
- Leary, D. 1982 Immanuel Kant and the development of modern psychiatry. In W. R. Woodward and M. G. Ash. (Eds.) *The problematic science: psychology in nineteenth-century thought*. pp. 17-42 New York: Praeger.
- Mack, D. & Rainey, D. 1990. Female applicants' grooming and personnel selection. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 399-407.
- 望月哲男・鈴木淳一(訳) 1995 ドストエフスキーの詩学 東京:筑摩書房, Bakhtin, M.M. 1963 Проблемы поэтики Достоевского
- 村澤博人 1992 顔の文化史 東京:東書選書
- 野嶋栄一郎 2001 心理学のメタ・グラウンド理論 中島義明(編) 現代心理学[理論]事典 37-58. 東京:朝倉書店
- 岡本祐子 2005 成人女性の「自分らしい生き方」の確認とアイデンティティーアイデンティティにとっての化粧の意味 化粧文化, 45, 8-13, ポラ文化研究所
- 岡村理栄子・金子由美子(著) 2005 10代のフィジカルヘルス2 おしゃれ&ブチ整形 東京:大月書店
- Rudd,N.A. 1999 Cosmetics consumption and use among women: Ritualized activities that construct and transform the self. *Journal of ritual studies*, 11, 59-77.
- Sato, T., Yasuda, Y, Kido, A., Arakawa, A, Mizoguchi, H, & Valsiner, J. (inpress). Sampling Reconsidered: Personal histories-in-the-making as cultural constructions. In J. Valsiner & A. Rosa (Eds), *Cambridge Handbook of socio-cultural psychology*. New York: Cambridge University Press.
- Shweder,R.A. 1990 Cultural Psychology—What is it? In *Cultural Psychology: Essays on comparative human development*, ed. J.W. Stigler, R.A.Shweder,and Gilbert Herdt. New York: Cambridge University Press.
- Strauss,A.& Corbin.J 1998 *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory*. Thousand Oaks: SAGE.
- 土屋由美 2004 対話的關係の交渉と歴史としての声:ある脳梗塞患者の社会的機能の障害から考える 石黒広昭(編) 社会文化的アプローチの実際 129-152.

京都：北大路書房

矢吹理恵 2004 日米国際結婚夫婦の妻におけるアメリカ文化に対する同一視 質的心理学研究 3,94-111.

やまだようこ 2004 質的研究の核心とは 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ(編) 質的心理学—創造的に活用するコツ 8-13. 東京：新曜社

Valsiner, J. 2000 *Culture and human development*. London: Sage.

Valsiner, J. and Sato, T. 2006 Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? Straub, J., Kölbl, C., Weidemann, D. and Zielke, B. (Eds.) *Pursuit of Meaning. Theoretical and Methodological Advances Cultural and Cross-Cultural Psychology*. Bielefeld: transcript.

Wertsch, J.V. 1990 石黒広昭(訳) 1991 合理性の声—精神に対する社会文化的アプローチ—現代思想 19 (6) ,114-129.

Wertsch, J.V. 1991 *Voices of the Mind — A Sociocultural Approach to Mediated Action*. 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子(訳) 2004 心の声 東京：福村出版

注

- 1) 薬事法は、昭和三十五年八月十日法律第四百十五号として制定され、現段階での最終改正は、平成一八年六月二一日である。
- 2) Wertsch (1990) が提示した概念であり、Bakhtin の「権威的な言葉」がもとになっている。「権威的な言葉」は他の「声」との接触能力を欠いており、他の「声」との「対話」によって相互活性化されることを極力拒む。Wertsch はそのような「声」の権威性の考えを援用し、固有の社会文化的状況における「声」と「声」の関係を、よりダイナミックにとらえる概念として「特権化」という用語を提示している。

(修士課程)